令和７年度中国・南昌市への青少年訪問団派遣事業
事後報告書

◆名前：　伏見　燿

江西省及び南昌市に滞在中の様子や本事業で得たこと、感想等をご記入ください。
（１，０００字程度）

インターネットが発展した現代において、南昌市や江西省について知るにはパソコン一つで事足り、小１時間もあれば旅行サイトやSNSを漁るだけで旅行した"つもり"になれます。しかし、そんな時代だからこそ本物に触れる価値があると考え、私は今回の訪問団に参加しました。

今回江西省で過ごした６日間の中で特に印象に残っているのは現地の方との交流です。日本語を勉強している学生さんたちとの交流が何度かありましたが、皆さんとても上手でたくさんおしゃべりすることができました。特に日本の学校生活に興味があるらしく、高校生の恋愛事情の違いについて盛り上がりました。他にも、大学で専攻している分野の話をしたり、好きなアニメの話をしたりとても仲良くなれました。私は中国語を話せるわけではないのですが、唯一中国語で暗唱できる孟浩然の「春暁」を披露したところ、大ウケしてとても嬉しかったです。それをきっかけに日本では漢文の授業があるという話や、入試にも出題されるという話から、日中の入試制度の違いにまで話題が発展しました。また、２日目の「日中青年友好交流会」歓迎レセプションではお互いの国の文化に関わる出し物を披露し合いました。私たちは日本の伝統的な民謡であるソーラン節と日中のヒットソングメドレーを高松市の法被を纏って踊りました。目の前の円卓に広がる美味しい中華料理や歓談に夢中になっていた人たちも巻き込んで会場を一つにすることができたと思います。日本の楽曲の歌詞は分からないかもしれないけれど、リズムやダンスを楽しむ心は世界共通なのだと感じました。

この滞在で実感したことは「見たい！」「聞きたい！」「知りたい！」という気持ちとそれを表現することの重要性です。交流する中で、中国の文化や生活、言葉など気になったことを質問すると優しく丁寧に教えてくれました。おかげで中国語での自分の名前の読み方や、「謝謝」「好吃」などの簡単な中国語の発音、それから中国流の乾杯の作法はばっちりです。また、逆に自国の文化に興味を持ってもらえると嬉しさを感じるとともに、日本人であることを誇らしく思えました。きっと私たちに質問された江西省の方たちも同じように思ったのではないかと思います。好意的な好奇心で得た知識や体験は自分の世界を広げてくれるだけでなく、興味を持つこと自体がコミュニケーションを産むことに気づきました。言葉が分からなくても「伝えたい！」気持ちさえあれば心は通じ合えます。積極的に「知りたい！」という気持ちを表現することで友好を深めることができたと思います。

出発前から滞在期間中、一緒に参加した団員をはじめとして高松市や南昌市、江西省の関係者の方など関わっていただいたすべての方に感謝しています。ありがとうございました。旅は一期一会といいますが、現地での一つ一つの出会いがこれからの私自身の人生の糧になっていくと思います。実際に現地に赴くことで、出発前の印象と異なることも多く、自身の知見が深まりました。ここで得た国際感覚を一層養い、今後グローバルな人材として世界で活躍していくことを誓って結びとします。